

の「遊び」へさまよい出る。「観念」の「遊び」は純粹科学であってテクノロジーとは異なり、詩であることは氏が保証してくれたところだ。はたしてこの遊戯の仮説が文学の非ユークリッド幾何学を生み出してくれるであろうか、これは、筆者の責任である。こうなると、やはりサイファー氏はなかなかどうして剛の者だと感嘆せざるをえない。

Wylie Sypher: *Literature and Technology*
—*The Alien Vision*, Random House, 1968

Peter Paul Schwarz:

*Totengedächtnis und
dialogische Polarität
in der Lyrik Paul
Celans*

Peter Horst Neumann:

*Zur Lyrik Paul
Celans*

猪 口 弘 之

〈パウル・ツェーランの詩は dunkel である〉の一句をシュヴァルツは冒頭にすえた。ノイマンもまた〈パウル・ツェーランの詩を一度でも読んだものにはその詩行の dunkel さと魅惑とが同等に印象づけられてしまった(はずだ)〉と序文をはじめ、さらに〈日常の言語とは全く別のこの詩的言語の法則性をたどることがここでは〈ゲルマニストの課題〉であり、〈この小冊子の五つの章はリルケの《ドゥイノの悲歌》以来もっとも難解なドイツ語詩へ理解の扉を開こうとするものである〉とまでいっている。——だがこの Dunkelheit とはなにか? シュヴァルツは周到に、Dunkelheit 自体は詩の価値・無価

値の基準にはならず、ツェーランの詩が dunkel であるという理由で非難したり逆に賞讃したりするのは危険だと指摘している。ただこのような自明のことから論をはじめなければならぬことがそもそもいらだたい。

ツェーラン自身はビューヒナー賞受賞記念講演《子午線》で、〈詩の《Dunkelheit》を非難するのが今日ではごくあたりまえになっています〉とのべ、それに対してパスカルの言葉をひいた上で、この Dunkelheit は詩にとって本質的なものであると語っている。魅力的な主張だが、ツェーラン自身の作品についてはひとまず留保する必要がある。表現手段の(多かれ少なかれ歴史的つみあげのある)複雑さをとりのぞいてみてなおそこに難解さを見出しえたときはじめて、それこそが詩人の思想の質や精神的位相からくる本質的な Dunkelheit といいうるのだから。

この二冊の場合、論の進行に丹念にかかわりあうことなく要約を示すことは困難なばかりか無意味にも思えたが、一々の論点の紹介や批判をするスペースがなく、やむをえなかった。

シュヴァルツは、それまでの解釈の多くがある特定の詩集だけをしかも特定の視点からだけ論じてきたことを不満とし、ホルトフーゼンがあげたツェーランの詩における die erotische Polarität zwischen Ich und Du とフィルゲスの論文《Die Gestaltungsschichten in der Lyrik Paul Celans, ausgehend vom Wortmaterial》とを主な手がかりとしつつ、二つの論の方向を転換せしめて eine Gesamtdeutung und Bewertung をめざす、と自著の意図をのべている。なお彼の論は《子午線》の主張をツェーラン自身の作品にあてはめようとする性格を強くもっている。

ツェーランの詩の構造の法則とその発展をみるのが先決問題であるとするシュヴァルツは、いくつかのキーワードの検討からはじ

め、Stein と Nacht をまずとりあげる。これらは伝統的な詩的象徴であるが現代詩にあってはそれを超えて〈世界経験の実存在的本質〉になっており、トラークルの〈ein steinernes Dunkel が突然やってきたのです〉がすでにそのシグナルであったとする。

〈この語の意味するものはなにか〉という〈研究〉が〈(深層)心理学的図式化〉にすぎなかった例は少なくない。そこには〈ある語はかならずそのままひとつの対象に対応している〉という信仰しかない。ツェーランのつくり出す言葉は〈このようなよびかけがなければ存在していないであろうような、またこの一語にだけ到達可能であるような、なにものかをひきだすのである〉というノイマンの発言も、神秘的でこそあれやはり〈対応〉以上のなにものいいえてはいない。彼は Mitteilungssprache と Dichtersprache とを区別し、〈ある詩の伝達をめざす度合が大きいほど、一般にその言語の独自性はますます伝達機能のうしろにひきさがり、したがってその言語はいっそう《詩的》ではなくなる〉とする。だが表現の背後にそうした別々の言語など存在しないことはいうまでもないし、伝達機能が少ないほど詩的になるというのもいいかえを必要とする。そういう〈詩的〉な詩があればそれは、言語に対して対他性の脈絡を見失うほどまでその対自性の緊張を強いているということであり、逆にいえば対他性を放棄することによってのみ対自性の極度の緊張を保っている表現の姿である。認識の構造と表現の構造とを関連づけてとらえず、見かけの表現の構造にとらわれると、余計な Dunkelheit を仮想してしまう。対象に対する意識水準の表出の面をみないならば、〈シンボル・ハンティング〉はいかにみごとな手さばきによっても、無惨な解剖学が逆に神秘的言霊信仰かに墮する。ツェーランにあってはこの対自性の極度の緊張とレトリック（小

手先のことという意味ではない）の複雑さをひきさると、彼の孤独な精神状況をうつす Dunkelheit がかすかに存在するだけである。彼の詩の基本的な性格は不変であり、ハイデガーのトラークル論のひそみにならって、ツェーランの詩は究極的——根源的——には〈一つの〉詩であるとすらいいたくなる。

シュヴァルツの検討にもどらう。不満はあってもその分析はやはり圧倒的である。第一章では Stein という〈その中にツェーランの詩の実存的問題性が表現されようとしている〉語が Tod という根本体験に基づくことが示され、Stein と Träne の関係や、die versteinerte Zeit, steinblau などの語の〈解明〉がなされる。Stein にはほかに das schlechthin Verschlossene の意味もあって、ツェーランがいかにか周到にこの語をえらんでいるかも示される。《子午線》の軽妙なしめくくりをなす〈子午線〉と〈詩〉〈言葉〉の諸特性の一致をおもうと、シュヴァルツの指摘もかならずしもがちすぎではないようだ。

第二章では Nacht を扱う。光と闇とを逆転し、また Zeit の秩序を破壊することによって、そこにひらかれる Nachtraum という超現実ないし無意識の領域で、詩人の Ich が Du（死者、ことに死せる母に結びつくことが多い）との対話を行なうという、ツェーランの詩の基本構造が明らかになる。詩人自身が《子午線》で〈詩は対話となります——絶望的な対話となることもしばしばです〉と語り、その意味を詳細に説明している。

第三章は、ツェーランの詩の構造を規定する〈詩人の Ich と死者の Du との双曲線の緊張関係〉すなわちこの〈弁証法的対話的極性〉をささえるパラドックスなどの表現手法を問題にしている。Ich に生・存在・時間、Du に死（超越）・非（超越）存在・非（超越）時間をふりわけ、その緊張関係について語るのである。ホルトフーゼンのいわゆる

die erotische Polaritätはその意味づけを変じてとりこまれた。

この対極性が全詩集を通して展開していくことを、第四章では Augc のモチーフの解析によって検討する。Träne, Krug, Mandel との関係の分析には説得力がある。また初期には不条理なメタファーによる alogisch な Stil にその特性をもっていたツェーランの詩が、次第に Ich-Du-Polarität の緊張に抽象性をもちはじめ、とくに《Sprachgitter》に至ると Ich の Du への〈接近〉が不可能であることがわかり、したがって沈黙も positiv なものからその質を変ざることなどがいわれる。ヘーゼルハウスの Sprachgitter 概念の解釈への反論もおもしろい。

Du への接近をあきらめたはずのツェーランの詩が、かえって《Die Niemandrose》でもっとも dialogisch になっているのはなぜかを最終の第五章は論ずる。ここでは Ich の上昇への苦悶はもはやなく、Ich は Du のもとに上昇しおえたものとして、メタファーのつみかさねなどもなくすつとおかれていく。(ここに生ずる簡素な表現を老成・枯淡の境地とみることは危険であって、ツェーランの意識性はますます強くなっているのであるが。)

対話は歴史的次元にくみこまれていき、個と個の関係を超えていく。Du はしたがって歴史的現実としての力を獲得する。ユダヤ民族の受難もまた überzeitlich に、そのようになってきた精神的宗教的伝統の殲滅という意味でとらえられる。この歴史的現実の次元の展開は、一方ではテーマを客観化し、Ich-Du-Polarität が現実的な意義をもって主観的ニヒリズムの超克となりうるようにするが、他方ではユダヤ民族の歴史の深淵を通じて Nichts との客観的・非個人的対決へ導かずにはおかない。個を超えたユダヤ民族全体にこそ Du の根拠があるとすれば、その絶滅

の問題に詩人はかかわらざるをえないからである。必然的に対話は神との対話となり〈Psalm〉には Ich に代る wir が現われる。ただし讀えられるのは Gott ではなく Niemand である。(nichts-Nichts, niemand-Niemand の変性は注目に値する。)これについてシュヴァルツは瀆神とも、また Gott のパラドックス的表現ともとれる、否この二つの意味は相接しているのだとのべる。

同じ詩集の後半にはその Nichts をのりこえたツェーランの明るいトーンがなりわたる。初期の詩集で要求された〈daß der Stein sich zu blühen bequemt〉がここでは〈Hekkenrose〉として達成される。後期の詩法では sprachlicher Entwurf が Realitätse Entwurf になっているという。補足するならば、Du は固定したものではなく常にそのときかぎりのものであってよび出されてはまた消えている。詩人は常によび出す努力をしなければならぬ。(ゲオルゲの《生の絨緞》における〈天使との対話〉と比べてみると興味深い。)ツェーランにとって Sein は究極のところ Nicht-Sein に同化する宿命にあったとはいえ、彼はあくまで Sein を求めてきたはずであり、しかもツェーランの詩業はここにひきだされた形而上学よりもっと生々しい闘いであったと思われる。シュヴァルツはあまりにツェーランにつきすぎて、Täuschung すらともに行っているのではなからうか? とくに最後の部分はあまりに楽観的にすぎるようだ。

次にノイマンの手法をみてみよう。彼はフィルゲスの Wortmaterial の扱いに注目し、さらにこれを徹底させた。彼は別に《Wort-Konkordanz zur Lyrik Paul Celans bis 1967》を出版しているが、それはこの論文の執筆に際しての〈副産物〉である。彼は索引をフルに活用して一種の言語統計学を示す。第一章においては Mitteilungssprache との

へだたりをもっとも顕著に示すものとしてツェーランにおける合成語の研究を行なうのである。たしかに《Sprachgitter》以後のすべての詩集の題名は合成語になっているし、詩の中のツェーラン独特の合成語は後になるに従っていちじるしく増加していることはあらゆる読者の気づくところであろう。統計という手段からいったいなにほどのものがひきだせるかは疑わしいのであるが、ここに示された結論のうち興味深いものはいくつかある。たとえばツェーランの合成語（新語）は全くあらたな認識の表現でありながら、すでに十分 *vertraut* なもののおかれていることに極度の意識性が感じられること。メタファーを一語に結合せしめたものが多く、これは言語の *Verknappung* ないし *Askese* であると同時に *Erweiterung* ないし *Hyper-trophie* でもあること。ツェーランが合成語へのかたよりを強めていく結果、言葉の緊張が強められていくと同時に凝固の傾向をもみせること。これは言語の可能性の限界での試みであること。ハイフンが、合成語の熟成の過程でも現われるが、後には分解の機能をもって、本来一語のものを構成要素に分けたり *Enjambement* をさせるようになったりすることに *Zerfall* への傾向が認められること。言葉の構成が常に〈*nach dem Bilde des Schweigens*〉によっていること……等である。ここに整理された諸事実はツェーランのレトリックの解明にあたり基本的な手がかりにはなる。

第二章は Mandel を扱っている。シュヴァルツにすでに詳細な論があるが、ノイマンは *Auge* を通しても〈ユダヤ〉と関連づけ、*Dichtertum* と *Judentum* とがツェーランにおいて不可分であると指摘する。なおこのことはツェーランがツヴィタイーヴァの〈すべて詩人はユダヤ人である〉の句をロシア語のままある詩のモットーとしたことによって

も確認できよう。ツェーランにおける〈ユダヤ〉は重要な問題である。彼が血統や受難の体験を強く意識しつづけてきたのは当然であるが、ネリー・ザックスとはきわめて接近しながらついに一致しない。一方マルクスの〈ユダヤ人問題について〉の視点を彼は獲得することがなかった。彼にとっての問題はけっきょくアウシュヴィッツ以後の *Sein* であって（ついにはこれは *Nicht-Sein* であり *Tod* であったが）、彼は〈非ユダヤ的ユダヤ人〉に対していわば〈ユダヤ的非ユダヤ人〉ともいべき存在であった。

第三章はユダヤの *Mythos* がツェーランの詩の背景にある一例を示し、ユダヤ民族・ユダヤの神に論を及ぼす。シュヴァルツが死者を中心に論を展開したのに対し、ここには生者もまた異質でないという主張があって興味深い。

第四章ではノイマンはフリードリヒに従って *Dunkelheit* と相関概念である *Modernität* を *Aktualität* に対置し、〈*Todesfuge*〉などでこの両者がたまたま一致したのは、それが *Anklage* ではなく *Klage* であるからだという。ツェーランが《子午線》の中で、三種のアクセントのうち私は〈*den Akut des Heutigen*〉をえらぶほかはないといい、また現代詩に沈黙への傾向があるとしたことも、多くの論者のように彼自身に簡単にあてはめるのは危険であるとし、ユダヤ民族の受難への追憶につらぬかれたツェーランの詩はその意味での *Aktualität* を常にもちつづけながら、〈*Schibboleth*〉とか雑誌《*Akzente*》に発表された〈*Einem Bruder in Asien*〉（ベトナム戦争に関連）のような詩の場合、彼の *Mitteilungssprache* をあまりに離れた言葉の性質から、けっきょく *aktuell* でも *modern* でもなくかつ他の詩にある密度すら失った無惨なものになっていると評する。私もこれらをツェーランの上等の作品とはみないが、そ

れはノイマンのというような表現技法の適否の問題ではなく、はっきりいって詩人の思想の質によるものと考えられる。〈Todesfuge〉における苦渋にみちた怨念のようなものがなくなってしまうとツェーランには手の届かないものがあるのではないか？ 逆にいえばこの挫折はツェーランの政治思想の挫折にすぎず、ツェーランの詩自体の挫折はここにはない。

第五章ではツェーラン自身が詩の存立を問いつづけていることが Wort, Sprache などの語を指標として説かれる。沈黙の Stein, Schnee, Eis, Kristall, 沈黙と言葉の中間に立つ Atem などの分析がある。《子午線》という das absolute Gedicht を、その不在を知りつつも求め続けてきたツェーランが、Atemwende をとげて個から人間一般へ、Nichts から Wahrheit へ、また Licht へと入っていくプロセスが説明される。

ツェーランの詩を分析し了解する作業は、この二人のドイツ人研究者の示したものが相補うことによってすでに基本的には達成されたといっているのではないか。残る二冊の詩集にわれわれが入りこむ際、これらの考察をふまえることはかなり有効であろう。だが〈了解〉ののちなおわれわれに対決をせまるものはなにか？ これはしばしば対比されていたノヴァーリス、ヘルダーリーン、トラークル、また日本のある詩人たちにおいても同じ問題であるが、その答をここに期待することはできない。なお一見言語破壊的な試みの裏にあるたぐみな定型意識の逆用のこと、韻律のこと、喩法・構成のことなど、残された課題は少なくない。(1970・11・23稿)

Peter Paul Schwarz: *Totengedächtnis und dialogische Polarität in der Lyrik Paul Celans* 1966, Pädagogischer Verlag Schwann.

Peter Horst Neuman: *Zur Lyrik Paul Celans*. 1968, Vandenkock & Ruprecht.

Gertrude Himmelfarb: *Victorian Minds*

山田 泰 司

ヴィクトリア朝思想もしくは思潮を取り扱った主な研究書として、われわれは D. C. Somervell: *English Thought in the Nineteenth Century* (1929), Basil Willey: *Nineteenth Century Studies* (1949), *More Nineteenth Century Studies* (1956), J. H. Buckley: *The Victorian Temper* (1951), Asa Briggs: *Victorian People* (1954), Walter E. Houghton: *The Victorian Frame of Mind* (1957) などをもっているが、ここに紹介する *Victorian Minds* によってヴィクトリア朝思想研究は、いっそうの厚味を加えることになった。著者 Gertrude Himmelfarb はニューヨーク市立大学の歴史学教授で、*Lord Acton: A Study of Conscience and Politics* (1952), *Darwin and the Darwinian Revolution* (1959) などの好著の著者であり、アクトン卿の論文集、マルサスの『人口論』、J. S. ミルの論文集などの編者でもある思想史家である。

本書に収められている13篇の論文は、3,4篇を除いてすべて編著の序文または学術・評論雑誌への寄稿論文からの転載であるが、それらは本書に収録されるにあたって大幅に書き改められており、寄せ集めという感じをあたえない。全体は3部から成り、「原ヴィクトリア朝人」(Proto-Victorians)の部にはエドマンド・バーク、ベンタム、マルサスがとりあげられ、「ヴィクトリア朝最盛期人」